

ブダペスト通信

盛田 常夫



2022年 NO. 17

4月2日

大坂ナオミは吹っ切れたか？

3月初旬のインディアンウェルズ大会（グラントスラムに次ぐ WTA1000 大会：優勝者が 1000 ポイント獲得）で会場のヤジに涙し、大坂選手は 2 回戦で早々の敗退となった。精神的な落ち込みの深さを感じさせる出来事だった。ところが、それに続くマイアミオープン（同じく WTA1000 大会）では、精神的肉体的な不調を吹っ切るかのように、はつらつとして姿を見せ決勝まで進んだ。初戦から、相手のウィナーショットに苛つくことなく、逆に褒め称えるような仕草で相手をリスペクトする精神的な余裕も見られた。

これで吹っ切れたのかどうかはまだ分からないが、少なくともゲーム中で精神的な落ち着きを取り戻す術を見つけたようだ。精神的肉体的な不調の長いトンネルを抜け出しつつある兆候を見た。

1年前のマイアミオープン準々決勝で、大坂はサッカリ（ギリシア）に完敗し、前年の全米オープンから続いていた連勝記録が23で止まった。そこから大坂は粘りのある難敵に勝てなくなり、負け癖が付いて五輪でも勝てなかった。それがまた、精神的な落ち込みに拍車をかけ、長い低迷期に入った。

その間に女子のトップ選手の顔ぶれが一変した。セリナ・ウィリアムズ、クヴィトバ、プリシュコヴァ、スヴィトリーナ、ハレプ、ムグルーザ等のトップランカーたちが上位ランクから外れ、代わってシオンテック、サバレンカ、ラドゥカヌ、バドーサ、クライチコーヴァ、サッカリ、コンタヴェイトなどの新顔が上位に位置するようになった。女子テニスも新旧交代の時期に入っているが、大坂はまだ24歳で、まだこれからの選手である。

対戦相手に恵まれたマイアミオープン

今年のマイアミオープンドローの上の山は、下の山に比べて、難敵が少なかった。ランキングが80位前後まで落ちると、初戦から厳しいドローになるのだが、大坂選手は準々決勝に至るまで、トップシード選手と顔を合わせることがなかった。本来なら、3回戦は昨年の全米オープンで敗れたフェルナンデスか、同じく昨年のマドリードオープンで負けているムホヴァとの対戦になるはずだった。ところが、フェルナンデス（カナダ）を破ったムホヴァ（チェコ）が、故障で3回戦を棄権した。これで難しい試合になるはずの3回戦を戦わずして勝利した。これはラッキーとしか言い様がない。4回戦のリスク（アメリカ）は粘りのあるテニスをするが、パワーでは大坂の相手にならず、与しやすい相手だった。ただ、この4回戦では大坂のサーブが決まらず、ゲームが長引いてしまったが、その分、ストロークが良かった。強烈なストロークでウィナーを40本も打ち、相手を押し切る場面が目立った。すっきりとは行かなかったが、パワーで押し切った試合だった。

準々決勝からは相手が誰でも難しい試合になる。対戦相手のコリンズは昨年から今年にかけて調子が良く、厳しい試合になると予想されたが、ウィルス感染による首痛から今ひとつ調子が上がらず、1時間ほどで相手を圧倒した。この試合、ここまで不調だったファーストサーブが決まり、サーブエースを13本取った。これにたいして、コリンズは7つのダブルフォルトを犯し、大坂はストロークすることなく20ポイントをものにした。これでは試合にならない。

コリンズも7本のサーブエースを打ったが、ファーストサーブの確率が低く、緩いセカンドサーブを大坂に徹底して叩かれた。大坂は相手のセカンドサーブにたいして、エンドラインから1mほどコート内に入り、相手にプレッシャーをかけ、フォアとバックにサーブを叩いて、リターンエースを何本も取った。まるで、1年前にサッカリにやられたことをそのままお返しするような展開だった。

準決勝戦

大きな大会で久しぶりのベストフォアまで進んだ大坂の準決勝の相手はベンチッチ（スイス、東京五輪金メダリスト）である。大坂の天敵と呼ばれるのは、大坂がトップランカーだった2019年に3度対戦して、全敗しているからである。ジュニアの時代から互いを良く知る相手で、ジュニア時代はベンチッチが上位にいた。ところが、2018年の全米オープンで優勝した大坂とベンチッチとの立場が逆転した。しかし、相性が悪いと、ランキングが当てにならない。ただ、2019年のどの試合も接戦だった。

東京五輪以降、ベンチッチは調子を落としており、インディアンウェルズでも2回戦で敗退している。しかし、マイアミオープンではここまで、セットを落とすことなく、勝ち上がってきた。大坂の状態を見る上で、注目すべき対戦となった。事前予想では、70%の確率でベンチッチ有利とされていた。

第1セットは大坂の1サーブダウンで、4-6とベンチッチが取った。このセット、大坂のファーストサーブのポイント取得率が88%であるのにたいし、セカンドサーブのそれはわずか18%だった。大坂のセカンドサーブが狙われていた。今ほどの選手も、大坂の弱点であるセカンドサーブを叩いてくる。ファーストサーブが入らないと、途端に自分のサーブゲームのキープに苦勞する。それでも要所でサ

ービスエースを決めて、第 1 セットのポイントはベンチッチ 32 ポイントにたいし、大坂は 30 ポイントだった。ポイントでは競っていても、これまでの大坂であれば、ずるずると負けるパターンである。

第 2 セットで大坂のストロークが決まりだし、センカンドサーヴィスにも工夫が見られた。スピードを上げたり、コーナーにプレースメントすることを意識して、簡単に叩かれないようにする工夫が見られた。これでセカンドサーヴィスのポイント取得率が 6 割まで上がった。他方でベンチッチのセカンドサーヴィスのポイント取得率は 37% まで落ちた。6 本のサーヴィスエースも決めて、このセットは大坂が取った。

第 3 セット序盤、大坂 1-2 のサーヴィスゲームで、相手にブレイクチャンスを与えたが、ここは粘り強く、サーヴィスをキープした。ここが最終セットの山場だった。ここで大坂がブレイクを許せば、相手に勢いを与えたはずである。他方、気落ちしたベンチッチは次のサーヴィスゲームを落とし、大坂が一気に引き離す展開になった。この最終セット第 4 ゲームで見せた大坂の粘りは、強い時の大坂の勝負強さを彷彿させるものだった。

これ以後、大坂はサーヴィスエースを連発し、このセットで 8 本ものサーヴィスエースをとった。この試合を通したサーヴィスエースは 18 本で、今年的女子選手の 1 試合エース最多記録を更新した。

ファーストサーヴィスが入る時の大坂は強い。ただ、第 3 セットのセカンドサーヴィスのポイント取得率は再び 20% に落ちた。しかし、大坂もベンチッチのセカンドサーヴィスを攻めた結果、ベンチッチのセカンドサーヴィスのポイント取得率は 33% にとどまり、サーヴィスゲームでは大坂が圧倒した。

以前から指摘されている大坂の弱点は、スピードのないセカンドサーヴィスとサーヴレシーヴの不安定性である。練習で修正を図っているはずだが、そう簡単にいかない。第 2 セット見せたような積極的なセカンドサーヴィスをもっと打てるようになれば、安定した試合運びができるはずである。引退したバーティはスピードこそないが、サーヴをコーナーに打ち分ける制御力があつた。大坂に期待されるのはセカンドサーヴィスの制御力である。これにレシーヴ力が付けば、再び世界のトップに躍り出るのは間違いない。問題は自分の弱点を克服しようとする意思の強さである。

対シオンテック決勝戦：盾と矛

3月初旬のインディアンウェルズで優勝し、WTA1000の連続優勝を狙うシオンテックは、バーティの引退でランキング1位になることが決まっている。絶好調で無敵のシオンテックに大坂がどう戦うかは、今年の大坂の戦いを展望する上で、またとない機会となった。この試合の見所は、シオンテックのストローク力と大坂のサーブ力の戦いである。まさにテニスの盾と矛の戦いである。

予想した通り、第1セットはまさに盾と矛の戦いであった。サーブエースを連発する大坂の攻撃と安定したストローク力で盤石のディフェンスがぶつかる好試合だった。序盤で7本のサーブエースを打ち込んだ大坂だが、サーブだけで試合を制することは難しい。ファーストサーブが入らないと、一転して弱いセカンドサーブが狙われるからである。実際、第1セットの大坂のセカンドサーブのポイント取得率は29%で、シオンテックのそれは55%だった。

もちろん、大坂も相手のセカンドサーブを狙ったのだが、相手のセカンドサーブを攻略したポイント取得率は29%にとどまり、相手のサーブを攻めきれなかった。それにたいして、シオンテックのそれは41%だった。

この二つの要因で、大坂は1ブレイクを許し、第1セットを4-6で取られた。総ポイント差は4ポイントだった（大坂35ポイント vs.シオンテック39ポイント）。

この日のシオンテックに勝つためには、大坂の状態が100%でなければならない。その難しさを実感したのだろう。第2セットの最初のサーブゲームを破られると、気持ちが切れたかのようにずるずると後退してしまった。サーブエースが取れないばかりか2本のダブルフォールトを犯し、逆にシオンテックに3本のエースを決められた。これでは戦いの武器を取り上げられたに等しい。ファーストサーブの確率が33%に落ちただけでなく、武器であるはずのファーストサーブすら攻撃され、ファーストサーブのポイント取得率が40%に落ちてしまった。これでは大坂選手は為す術がない。逆に、大坂選手のセカンドサーブ10本のうち、9本もポイントを取られてしまった。盾をもぎ取られた大坂選手は戦う武器をすべて失ったのである。

第1セットは50分ほどの熱戦だったが、第2セットは一方向的なゲームで、20分ほどで終わってしまった。大坂選手の課題が明々白々の試合になった。

大坂選手の今後はどうなるだろうか。現在でもトップテンの力があることは示されたが、再びトップに立つには克服すべき課題が多い。シオンテックと比較すると、弱点であるセカンドサーブやレスリーヴ力だけでなく、基本的な走力で劣っていることが分かる。シオンテックのストローク力の安定性は速い足の運びが土台になっている。素早くボールに近づき、しっかりとした態勢でボールを叩いている。フットワークが素晴らしい。これは天性のものだろう。大坂の走りがとくに遅いわけではないが、とても速いとは言えない。ボールの落下点への移動がワンテンポ遅れると、ストロークが安定しない。

強い相手が現れたことをポジティブに捉えて、トップを目指して弱点を克服しようとするか、それとも再び精神的に落ち込むか。これから苦手なクレイコートシーズンに入ることも、判断を難しくしている。クレイコートのプレイで、ストローク力やレスリーヴ力を磨く努力を続けるか、それともそのような努力に意味を見出すことができないか。すべては大坂選手の意欲にかかっている。